

聖書日課 『からし種』 2022.7.17-7.24

<p>7月17日 (日)  黙示録 15章</p>	<p>「七人の天使が最後の七つの災いを携えていた。これらの災いで、神の怒りがその極みに達するのである」(1節)。黙示録が語る「神の怒り」のすさまじさに、心が押しつぶされそうになる。今の私たちの世界をご覧になって、神がどれだけ痛みと悲しみと憤りを覚えておられるか。それでもこの世界を救うために「屠られるべき小羊」を送られた神の祈りを覚えたい。</p>
<p>18日 (月)  黙示録 16章</p>	<p>「見よ、わたしは盗人のように来る。裸で歩くのを見られて恥をかかないように、目を覚まし、衣を身に着けている人は幸いである」(15節)。新しい一日を主の御手からいただく朝、感謝と共に緊張を覚える。「真夜中の旅人のたとえ」(ルカ 11章)のように、主がいつどのように我が家のドアを叩かれるかわからない。その時にドアを開けていく信仰を祈り求めて。</p>
<p>19日 (火)  黙示録 17章</p>	<p>「この者どもは小羊と戦うが、小羊は主の主、王の王だから、彼らに打ち勝つ。小羊と共にいる者、召された者、選ばれた者、忠実な者たちもまた、勝利を収める」(14節)。十字架においてほふられた小羊、イエス・キリストと共にあることを願う者は小羊に戦いを挑む「女」(大バビロン)と戦う覚悟を求められる。小羊の勝利の約束を心に刻み、従う信仰を求めたい。</p>
<p>20日 (水)  黙示録 18章</p>	<p>「力強い天使が…こう言った。『大いなる都、バビロンは、このように荒々しく投げ出され、もはや決して見られない』」(21節)。黙示録が描く「バビロン」はローマ帝国のこと。皇帝は神に等しく、世界の富を握った商人たちは豪勢な生活を謳歌した。けれども黙示録は「神を畏れること」を忘れた人間の滅亡を厳しく示す。黙示録は今日の世界に何を語るのだろうか。</p>

メール配信登録メール [senfkorn.obc@gmail.com](mailto:senfkorn.obc@gmail.com)

大井バプテスト教会

メール配信希望の方は名前とアドレスを明記の上、上記のアドレスまで

聖書日課 『からし種』 2022.7.17-7.24

<p>21日 (木)</p> <p>黙示録 19章</p>	<p>「天使はわたしに、『書き記せ。小羊の婚宴に招かれている者たちは幸いだ』と言い、また、『これは、神の真実の言葉である』とも言った」(9節)。十字架でほふられた小羊は、現実世界においては、何の力もない小さな存在にすぎない。けれども天のエルサレムにはこの小羊を賛美する「新しい歌」が響いている。この小羊に「神の真実」を尋ね求めていきたい。</p>
<p>22日 (金)</p> <p>黙示録 20章</p>	<p>「彼らは神とキリストの祭司となって、千年の間キリストと共に統治する」(6節)。ここには「千年王国」の希望の世界が語られている。歴史的にはこの「千年王国」を現実化させようとキリスト者たちが武力を握った時代があったが、残念ながら挫折した。キリスト者が招かれているのは、この世界にあって「祭司」として神とキリストを礼拝する働きであることを覚えたい。</p>
<p>23日 (土)</p> <p>黙示録 21章</p>	<p>「神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってください。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない」(3-4節)。死と悲しみと、嘆きと労苦あふれるこの世界にあって、小さな一人と共にいてくださる主。この方の前で私たちは安心して涙を流すことができるし、主はその涙をぬぐってください。この約束を大切に握りしめて。</p>
<p>24日 (日)</p> <p>黙示録 22章</p>	<p>「然り、わたしはすぐに来る。アーメン、主イエスよ、来てください。主イエスの恵みが、すべての者と共にあるように」(20-21節)。キリストの再臨は、いつ、どんなタイミングで来るのか成就するのかわからない。それでも私たちは、キリストは来る！アーメン(然り)と言いながら、主の恵みが全ての命の上にあること祈り続けていきたい。</p>